

第2回 右から？左から？

皆様いかがお過ごしでしょうか？

「白壁兵舎の謎」、第1回からまさかの「**兵舎焼失オチ**」という波乱の幕開けとなっていましたので、今回は反省してもう少し大人しい謎(?)でいきたいと思います。

さて、今回着目したいのは「文章」です。史料館には戦前・戦中の新聞記事や本、学校の教科書、軍事郵便など、多数の文献・史料があります。その中で「横書き」で記述されたものを見ると、多くは**右から左**に書かれています。

筆者がこの右横書きに初めて遭遇したのは小学生の頃、図書館で『のらくろ（田川水泡著）』を読んだときですね。それ以来「昔は右から左に書いていた」と漠然と認識はしていました。

しかし、右図の教科書を見てみると数字は**左から右**に書かれているではありませんか。一体、どういうことなのか？今回はこの「横書きの謎」に迫りたいと思います。



↑ 歩兵第十六聯隊コーナーに展示されている写真。キャプションは「歩兵ノ飛行機射撃」と右から書かれています。完全に余談ですが、この射撃法は敵戦闘機の機銃掃射に対抗する手段として当時訓練されていたそうです。



↑ 『のらくろ』単行本。コミカルな内容ですが当時の世相も反映されており、興味深いですね。ちなみに戦前・戦後両方でアニメ化されている稀有な作品でもあります。



← 明治時代の「算術（算数）」の教科書。数字は左から書かれています。筆算もこの頃からあったんですね。

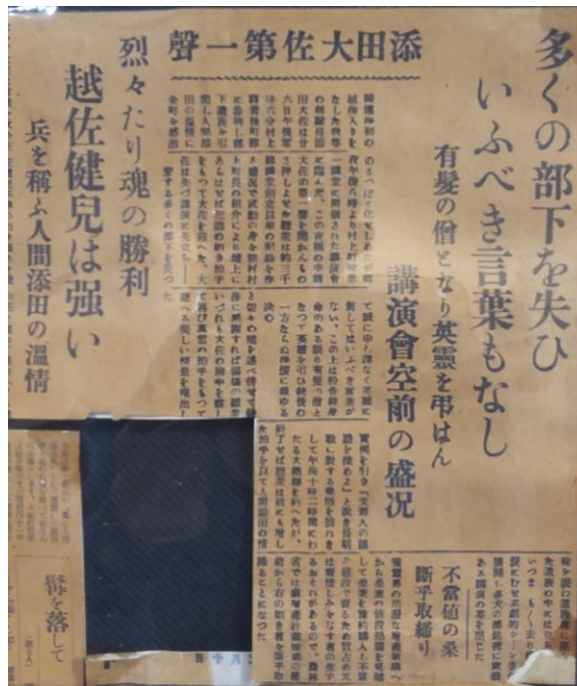
史料館内の戦前の展示品を見てみると、国債や賞状といった公的なものから新聞、手紙など私的なものまでほとんどの横書きは右横書きで書かれていることがわかります。

—「何故右から左だったのか？」—

現在は左横書きが当たり前になっていますが、元々日本語は**縦書きの言語**です。縦書きならば、右から左に改行して書きます。つまり、**日本人の感覚として文字の流れが「右から左」**だったということです。右横書きは「縦書きの延長として書いていた（1行1字の縦書き）」ということになります。

しかし全てが右横書きだったという訳ではなく、前述の算数の他に音楽、英語の教科書、技術書等も左横書きが見られます。用途に応じて柔軟に使い分けられていたとも考えられます。

結局のところ、「**縦書き・右横書きが主流で必要に応じ左横書きも使われていた**」ということだったのでしょうか？

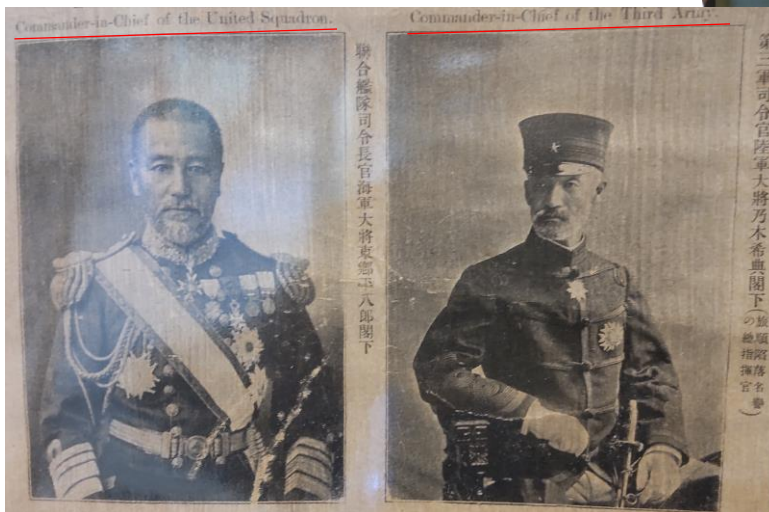


↑新聞の見出し「添田大佐 第一声」歩兵第百十六聯隊コーナーに展示されているもの。添田大佐は初代連隊長。



聯合艦隊司令長官
Commander-in-Chief of the United Squadron.

第三軍司令官
Commander-in-Chief of the Third Army.



↑日露戦争時の高級将官を紹介する掛図。
←赤枠部分の拡大図。
東郷平八郎大將（左）と乃木希典大將（右）が並んで紹介されています（階級は当時のもの）。見て欲しいのは上部の英語表記。英文は左から書かれています。

—「横書き」から見える日本人の心—

今回調べてみて興味深かったのは横書きと日本人の関係性です。先ほども「日本語は元々縦書き主体」で右から書く言語であったと書きました。明治維新以降、欧米文化が急速に流入することで左横書きも普及していったわけですが、当時これを「日本的ではない」と見る人も多かったようです。現代でも外来語のことを「横文字」と言ったりしますが、やはり同じ感覚が残っているのかも知れませんね。欧米的価値観が流入する中での日本人の複雑な心境がこの横書き一つからも垣間見える気がします。

ちなみに、昭和17年（1942年）頃から左横書きに統一しようとした動きもあったようですが、反発が強く結局戦後になってからのGHQによる統制で切り替わります。

今回は以上となります。横書きに関して、史料館には右の写真のような例外もありましたので、まだこの謎についてはまだ考える余地があるようです。皆さんも考察してみてはいかがでしょうか。（了）

演習（昭和9年）



野砲は野戦砲の主砲で、歩兵と協同して最も敏活に行動する。この砲の射撃目標は、主として戦場を移動する砲隊であるから、迅速な発射速度と低く伸びた弾道を利用し、自由に戦場を掃射しなければならない。
昭和9年11月2日阿賀野市千原付近での演習。

↑ 史料館内で確認できた左横書きの戦前の写真。
赤線部分に「9. 11. 2. 千原附近」と書かれています。
（戦後加筆された可能性もあります）



↑ 装備品展示コーナーにある将校用の飯盒（はんごう）。
名前は左から書かれています。こちらも戦後書き足されたものでしょうか。